

未墾地を 牧草地に改良するには

笹地等未墾地も案外簡単に

牧草地に仕立てることが出来ます。

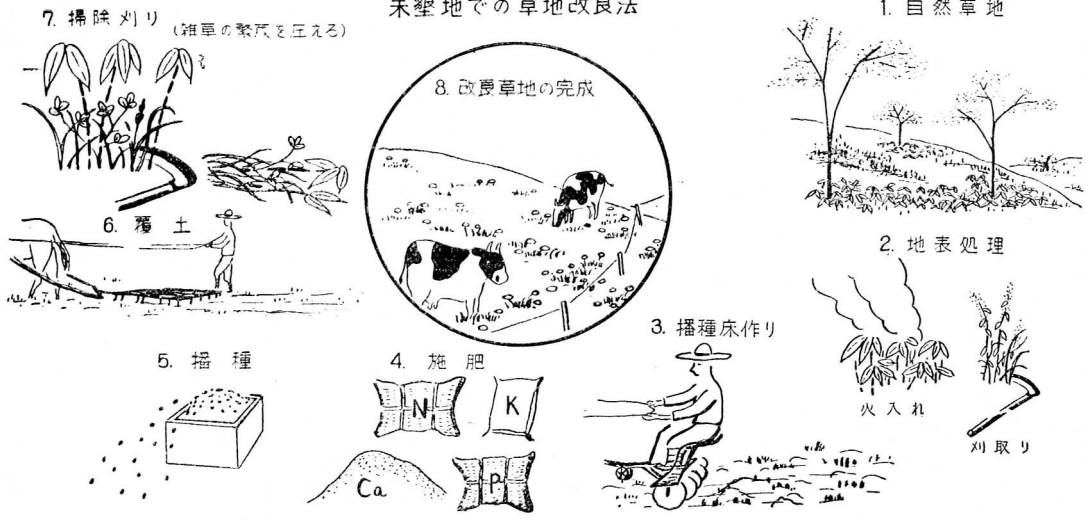
東北や北海道の野草地で最も広い面積を占めているのが、笹、すすき、はぎ類でありますが、これ等の草は牧草に較べますと栄養価が低く、その上に年に一度より収穫する事が出来ません。それはこれらの草は大体夏だけ生育する性質を持つた草だからであります。従つてこれらの野草地に栄養価の高い、しかも一年中何回でも収穫出来る牧草類が生えるようになりますと、もつともつと家畜に良質な草を豊富に与える事が出来、生産が拳がりその上、高価な購入飼料を節約することが出来るわけです。

ところが野草地は開墾をしなければ牧草の栽培が困難であると考えられる方が多いために、資金や労力という隘路に出喰わして、仲々牧草の導入が行われておりません。勿論野草地への牧草導入は開墾して行ふのが最善の方法であります。それが仲々出来難いときは次善の方法でも行い、兎に角、現在の野草地よりも生産の拳がる土地として活用すべきでありましょう。

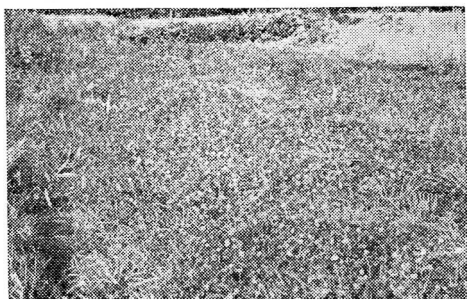
未開墾の野草地に牧草を導入する方法について、その順序を図示しますと下図の通りであります。

すなわち笹地等の未墾地への牧草導入で特に注

未墾地での草地改良法



- 除草種類の選定 オーチャード、ケンタッキー、ラデノクロ、ライグラス等を主体として反当五〜六封度播種。
- 施肥 基肥は勿論のこと、追肥もやります。無肥料ですと瘠地(その土地)に適した野草が元気でどうしても牧草が負けますから、石灰、磷酸、加里を主体に施肥しますと苜蓿牧草が旺盛になります。
- 播種床の作成 種子が土壌に接着し、また施した肥料が土壌とよく混ざるようにハロー、マング等で掻き廻し、同時に草の根も切るようにします。
- 掃除刈 永年牧草は初期の生育が遅いので雑草優占となり勝ちですから、雑草が伸びたならば、掃除刈を行います。この回数が二〜三回と重なるに従つて再生力の弱い雑草、野草は劣え牧草がグングンと生育を盛んにします。
- 地表処理 発芽初期の牧草が雑草や、藪等に压倒されないように刈取り、掘り取り、焼払いを行うこと。笹地にはクロレートソーダを散布しますと、容易に枯らすことが出来ます。



前年夏に播種した笹地の牧草 (翌年の一番草)

寒冷地

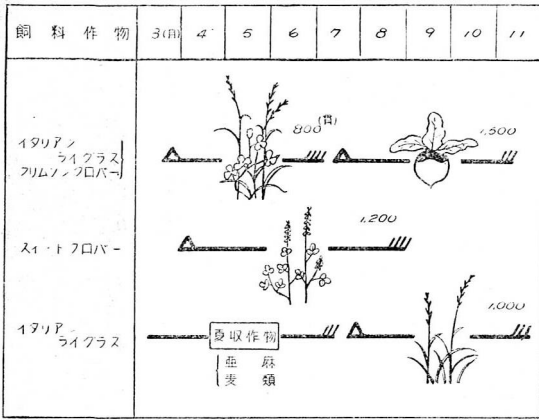
短年草地のつくり方

寒冷地でも三カ月の短期間で採草地がてきます

採草地がてきます

寒冷地の酪農経営には冬期乾草の準備が大切ですが、耕地面積が狭くて永年採草地を充分に持つことが出来ない場合とか、不安定なデントコーン栽培をやめて、牧草に切換えようとするような場合は、永年草地ではその態勢が出来るまでには仲々年月を要します。牧草は寒冷地では播種当年は大して収量が挙がらないものだというのが一般の考え方のようで、そのために初年は生産の挙がる麦類や、亜麻等と混播して先ず一作を他の換金作物で得て、その跡を牧草地として二年目から利用していた訳ですが、これは永年性牧草を主体とした考え方から出たものです。ところが短年性牧草を利用すると、寒冷地でも僅々三カ月で永年牧草地程度の多収を得る事が出来ますので、急に

寒冷地短年草地に利用される作物と生育期間



短年草地に利用される代表的牧草としては、イタリアンライグラスとクリムソンクロバード及びスイートフロバ等を挙げる事が出来ます。その栽培方法、生育期間、収量等上の図をご覧ください。播種後三〜四カ月で反当一〇〇〇貫の既成草地に劣らない収量を挙げる事が出来ます。特にイタリアン、クリムソンとかぶの組合せは一年に同一畑地から冬期に、必要な乾草と根菜を収穫し得て妙であります。

寒冷地 畑地の飼料多収栽培法

寒冷地で畑地、所謂飼料専用畑を利用する多収方法は

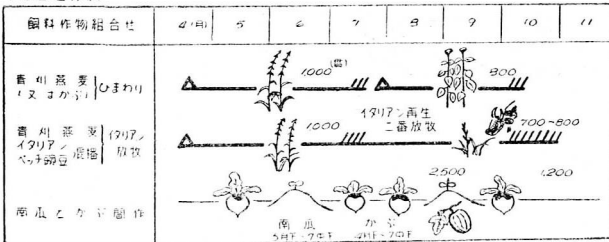
- 適作物、適品種の選定と混作
- 適切な肥培管理
- 土地の高度利用

の三点に期待しなければなりません。寒冷地では茎葉生産が主目的で穀実生産に比べて栽培期間がグット短縮される飼料栽培においても、一年一作で満足されている方の多いのは残念な事です。一年二毛作、少くとも二年三毛作は是非とも励行

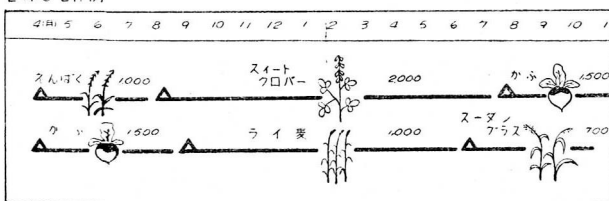


畑地の多収種栽培に利用される青刈燕麥、豌豆、イタリアンライ混播の刈取り

1年2毛作例



2年3毛作例



して、少面積から多収穫し、家畜の頭数を増したり、換金作物の栽培面積を多くするようにすべきでありましょう。

寒冷地で可能な土地の高度利用の飼料作物を考えてみるとつぎのようなものがあります。

- (1) 家畜南瓜(ボンキン)の畦間に早春かぶを播種、南瓜のツルの伸び始める七月中旬に約二、〇〇貫のかぶを収穫、秋には南瓜を収穫。
- (2) 青刈燕麥にイタリアンライを混播、燕麥刈後一カ月でイタリアンライが一尺位に伸び、秋まで通して放牧。
- (3) 早春イタリアンライ、クリムソンを混播、七月下旬約一、〇〇〇貫を刈取り乾草またはサイレージとし、跡地はかぶで冬季の貯蔵根菜。

その他種々とありますが次表を参照、前後作の関係、間混作等を利用して短期間に多収を得て、飼料生産を増加したいものです。

寒冷地 冬季貯蔵用飼料の作付

農閑期の冬は家畜で生産を挙げる

そのためには良質豊富な飼料の準備を

寒冷地の有畜経営で生草の不自由する所謂冬季は、北海道で二〇〇日、東北では一五〇日は一応見なければなりません。そしてこの間は貯蔵飼料に俟たなければなりません。しかもこの時期は農閑期であり、農産収入は殆どありませんから、この時期にこそ、家畜に大いに働いて貰わねばなりません。その根本は何といつても良質で豊富な飼料の用意如何であります。

寒冷地の冬季の基礎飼料は

◎乾牧草 ◎エンシレージ ◎根菜類

であります。この三者を良質に、豊富に準備するか否かによつて、その年の経営の成功か不成功かが決定されるといつても過言ではないといえます。

(一) 乾 草

ビタミンB₁をよく保存する乾草は、成畜は勿論仔畜にも飽食させて心配のない飼料で、家畜一頭につき少くとも一トン(二六〇貫)は準備すべきであります。

勿論この乾草も昔料、禾本科牧草混播のものが良質で、開花前後の適期に刈取り、迅速に水分を除き、且つ葉を落さないようにすることが大切です。

(二) エンシレージ

牧草や青刈類をサイロに充填して貯蔵したエンシレージ(またはサイレージ)は、生草と同様多汁質で養分損失も少く、特にビタミンAの保存が良好で、家畜も好食し、積雪期間の長い寒冷地では冬季飼料として極めて適当な飼料であります。やり過ぎは良くありません。乳牛であれば日量五〜六貫が適量であると言われております。

エンシレージは貯蔵場所が少なくてよい、つくり易い、経済的である、食い残しや無駄がない、貯蔵中に変質が少い等のため、冬季の飼料はエンシレージ一点張りという方も少くありませんが、家畜の健康を考えるとときにはこれの単飼は避け、乾草、根菜類と併用して必要養分量を補給するように心掛けなければなりません。

(三) 根菜類

寒冷地の安全多収作物である飼料用根菜類は、成分的にみても穀物と同様炭水化物飼料で、中庸で濃厚に過ぎず、粗薄でもなく、好適なものであります。また繊維も適度に含み粗飼料の性質をも持つており、濃厚飼料と粗飼料の両方を兼ねた飼料といことが出来、その上ビタミンが豊富で、泌乳性が高まり、まことに安全良質な飼料であります。日量少くも五貫位は準備したいものです。

冬季の基礎飼料としてこれらをどの程度準備すべきか、更に乳牛一頭についてどの位の作付をなすべきかの参考を示しますと、次表の通りであります。

搾乳牛一頭当り一日の給与量と所要面積一例

飼料	一日の給与量		普通地(二〇〇日)		必要反別	
	給与量	飼料可消化単位蛋白質	収量	反別	必要反別	必要反別
荳科禾本科 混播乾草 エンシレージ (玉蜀黍) 根菜 (家畜ビート)	二五貫 七〇 七〇 六〇	四三 四三 三〇 三〇	二〇〇 二〇〇 一〇〇 一〇〇	一六 一六 一三 一三	一五〇 一五〇 一〇〇 一〇〇	一五 一五 一〇 一〇
計	六〇 二〇六	八三 三三	一〇〇〇 四三	四三 三三	一〇〇 三三	一〇 三三

即ち日乳量七升、脂肪率三・二%の乳牛に対しては前表の一日当り給与量で、濃厚飼料なしで充分



トップだけでも赤クロバー程度の飼料生産の挙がる家畜ビート

搾乳する事が出来、このためには普通の地力程度の土地で北海道では大体四反半、東北地方では三反七畝を準備すれば充分であります。

是非とも今年はこの等の作物を計画栽培し、来る冬には暖い畜舎で不足なく飼料を与えて、冬乳を増産しましょう。

なお乾草や、エンシレージ用作物、根菜には種々な牧草や、作物が充てられますが、寒冷地で最も有利と思われるものについて述べますと、

(1) 乾草草としてはクロバー、ルーサン等の荳科牧草とチモシー、オーチャード、ライグラス、メドウフェスク、ブROOMグラス等禾本科牧草の混播されたものがよい。(輪作草地永年採草地一〇頁参照)

(2) エンシレージ作物としてはデントコーンは子実の熟するような品種系統、例えば東北、北海道中央部以南では黄色デント、北海道東北部ではハイブリッド(二代雑種)の複交系やU系等を選び、これに大葉つるまめ等を混播しますと、デントコーン、エンシレージに不足勝ちな蛋白質含量が多くなり、日乳量一斗位の乳牛でも濃厚飼料なしで飼えるようになります。デントコーンの他、牧草エンシレージ、スーダングラス、ソルゴー、青刈えん麦、根菜茎葉等も良質なエンシレージ材料となります。

(3) 根菜類にはかぶ、ルタバガ、家畜ビートがあり、それぞれ特色をもつており(九頁解説参照)土地や作付の状況によつて適宜選択すべきであります。